

中期英語における否定表現について

西 村 政 人

I. 序 論

1. 問 題 提 起

従来の英語の否定表現の研究については、O. Jespersen による通時論的記述があるのみで、中期英語(注1)の否定表現に関しては、筆者の調べた限り、13世紀の作品を扱った論文(注2)やカンタベリー物語の否定表現について述べた論文(注3)があるだけである。そこで本稿では、統計的調査を基にして、まだ手がつけられていない14世紀の作品(韻文)を扱い、その中で用いられている否定表現を考察しながら、頭韻詩と脚韻詩との比較を行うことを目的とする。筆者が14世紀の作品を選んだ理由は

- (1) 文学史上、14世紀中頃から16世紀始めにかけて約20ほどの頭韻詩が作られ、この時期が「頭韻復興」と呼ばれていること。
 - (2) 頭韻詩と頭韻詩あるいは頭韻詩と脚韻詩といった比較研究が従来行われていないこと。
- 主としてこの二つである。なお扱う作品は次の通りである。

頭 韻 詩

作 品 名	成立年代(A.D.)	方 言	行 数
○ Sir Gawain and the Green Knight	1350～ 1375	West Midland	2530
○ Piers Plowman	1362	South Midland	2584
○ Pearl	1375	West Midland	1212

脚 韻 詩

作 品 名	成立年代(A.D.)	方 言	行 数
○ The lay of Havelok the Dane	1300	East Midland	3006
○ The House of Fame	1380	East Midland	2158

○ The Parliament of Fowls	1380	East Midland	699
------------------------------	------	--------------	-----

(なお、これらの作品名に関しては、以下略語を用いるので、本稿末の略語表を参照されたい。)

2. 英語の否定構造の史的発達

英語の否定構造の発達は、その史的発達において比較的多様な変化を示しているものの一つである。その発達の概要を O. Jespersen (注4)に従って示せば、次の5段階となる。

- ① ic ne secge.
- ② I ne seye not.
- ③ I say not.
- ④ I do not say.
- ⑤ I don't say.

①は古期英語の代表的な否定構造であった。ここでは否定詞の ne が動詞の前に位置している点が注目される。古期英語では他におそらく強意のために、動詞の後に更に別の否定詞 *nawiht* (> not)を追加した構造も用いられることがあり、これが次第に定着して②となり、中期英語の代表的構造となった。②では、ne はしばしば十分な強意を持たなかったと想像され、脱落する傾向にあり、やがてこの傾向が定着して③が生じた。その時期はおよそ15世紀だとされている。③については、not の位置が①の場合とは異なり、動詞の後へ移されていることが注意すべきことである。

以上①②③の段階は、そのままドイツ語にもあてはまる。ただし、ドイツ語は現在③の段階で止まっていてその後進展していないが、英語は更に次の発達段階へと進んだ。すなわち15世紀始めに、否定叙述文に do が導入された。この新しい否定構文は、17世紀末に完成されたとされている。

本稿で扱う作品は14世紀の作品であるので、上述の①②③の発展段階を更に詳細に論じることになる。

Ⅱ. 本 論

各作品における否定表現を作品別に調査していくことにする。

1. 頭 韻 詩

先に述べた頭韻詩の作品の中に現われる否定表現を抜き出して、それらを否定詞の種類によって分析していくことにする。なお用例末の行数は、使用テキストの行数を示している。

〔1〕 ne

ne には二つの機能がある。一つは否定副詞としての ne, もう一つは否定接続詞としての ne である。

最初に否定副詞としての ne が, どういう動詞と共に起しているかに焦点をあてて分析していく。(注5)

(i) be 動詞以外の動詞

PPI

For gif he ne rise þe rap̃er · and rauhte to þe steorne, (9:30)

彼がすぐに立ち上がって, 舵柄に手を伸そうとしないならば

Pearl

Where wysteȝ þou euer any bourne abate,

Euer so holy in hys prayere,

Pat he ne forfeȝed by sumkyn gate (619)

Þe nede sumtyme of heueneȝ clere?

とにかくしばらくでも, 輝かしい天の報酬を失わないほど, その祈りにおいて清らかな身をした人が一体どこにいらっしゃるのでしょうか。

(ii) 助動詞+動詞

PPI

herto assentid syuyle · but symonge ne wolde (2:111)

tyle he had syluer · for his sawes & his selynge.

これに対して民事法は同意するが, 聖職売買の法は, 自分の調印, 署名への銀貨を得るまで同意しなかった。

Pearl

Deme Dryȝtyn, euer hym adyte,

Of þe way a fote ne wyle he wry þe. (350)

主を責め, 主を非難したとしても, 主がその道を一步たりともお変えになることはありません。

否定副詞の ne は本稿で扱った頭韻詩では使用頻度は少なく, 更に ne が be 動詞を否定し

た例は PPI にのみ現われる。

(iii) be 動詞

PPI

Pat haue schulde þe pore parrisschens · gif þat heo ne weore (Prologus:79)

彼らがいなければ教区の貧しい人たちがもらえたであろう。

次に否定接続詞としての ne であるが、主として節と節(文と文)と否定節中の要素間の接続一名詞と名詞、動詞と動詞など(注6)一に使われる。また、naþer ... ne の形で現われる。

(i) 節と節(文と文)

この場合「Negative + ne + Negative」が原則で、「Affirmative + ne + Negative」は現われない。脚韻詩でもこの傾向は強い。ただ、後者の例が、Havelok, PF に一例ずつ現われている。

PPI

And þo nolde þe wastor worche · but wandren aboute,

Ne no Beggere eten Bred · þat Benes Inne coome. (7:291)

そうすると消費者は働かずにぶらぶら放浪し、また、乞食は乞食で豆の入ったパンは食べようとしないで

Pearl

Now rech I neuer for to declyne,

Ne how fer of folde þat man me fleme. (333)

今、私はどれ程落魄れようとも、また、故国からどれ程遠くへ追放されてもかまわない。

GGK には(i)に属する用例は現われない。

(ii) 否定節中の要素間の接続

三作品とも名詞接続の用例が一番多い点が共通している。他の用例に関しては多少異なるが、一般的にその使用頻度は少ない。

○ 名詞接続

PPI

And I sigge, bi my soule · I haue no salt Bacon,

Ne no Cokeneyes, bi Crist ・ Colopus to maken. (7:272)

私は魂にかけて誓いますが、塩ベーコンも、それに、キリスト様に誓って、
ハムエッグを作るための卵もありません。

○ 動詞接続

Pearl

Pou cowpez neuer God naup̄er plese ne pray. (484)

あなたは神を喜ばすことも祈るすべも知らなかった。

○ 形容詞・副詞接続

PPI

And is not dronkeleuth ne deynous ・ Dowel him folewep. (9:75)

尊大でもなく、大酒飲みでもない人に、善行はついて行く。

○ 前置詞接続

Pearl には現われず、PPI と GGK に現われる。

PPI

Saue I neuere Palmere ・ with pyk ne with schrippe (6:26)

Such a seint seche ・ bote now in þis place.

現在までここで、杖と袋を持った職業巡礼者で、その方のことを尋ねた者は
いなかった。

〔2〕 ne ... not

否定表現の史的発達の過程からいけば第2段階にあたるが、Pearl, GGK, PPI で1例ずつ現われるにすぎない。

PPI

I ne schulde not dele wip hem. (7:68)

私と彼らと関係がありません。

Pearl

My Lorde ne louez not for to chyde, (403)

私の神はあら捜しは好きではありません。

従って、ne ... not はこれらの頭韻詩では、ほぼ消失していると考えてよい。

[3] not

本稿で扱った頭韻詩では、not による否定表現の使用頻度が一番高い。この not の位置は、否定副詞 ne と異なり、動詞あるいは助動詞の後に置かれる。

PPI

“Got wot,” quap wisdom · “þat weore not þe beste; (4:74)

知恵は言った。「神様も御存知のように、これは最善の策ではありません。」

この not に関しては目立たないが一つの傾向があった。F. Th. Visser(注7)は、「主として詩に限られるが、否定副詞 ne と同じく本動詞の前に not が置かれることがあった。」と指摘している。このような not の用法は1例だけ GKG に現われ、not の異形態である noȝt が使われている。

GKG

Þe lady noȝt forȝate, (1472)

Com to hym to salue;

その婦人は、彼の所へ挨拶に来るのを忘れなかった。

このような ne → ne ... not → not の史的発達過程の中で、ne, ne ... not の衰退を補うように使われたのが neuer, no である。これらの使用頻度は後述するが、ここでは no について若干触れておくに留める。

[4] no

否定詞 no は、否定主語、否定目的語、否定補語として使われ、否定補語は Pearl に現われるだけである。

(i) 否定主語

PPI

Beo no men hardore þen þei · whon heo beoþ avaunset; (1:165)

出世した時の彼らほど貪欲な者はいない。

Pearl

So gracios gle coupe no mon gete (95)

As here and se her adubement.

このような歓喜を誰も獲得できない。この壮麗を見たり聞いたりするように。

(ii) 否定目的語

PPI

“Bi Crist,” quap a Cutte-pors • “I haue no kun þere!” (6:118)

「キリスト様に誓って言いますが」と一人の拘摸が言った。「私はそこに親戚
はおりません。」

Pearl

The mone may þerof acroche no myȝte; (1069)

月もそこから光を得る力はなかった。

(iii) 否定補語

Pearl

Pou blameȝ þe bote of þy meschef,

Pou art no kynde jueler. (276)

あなたは、あなたの不幸を救済してくれるものを呪っています。あなたは宝
石商ではありません。

最後に中期英語の否定表現を論じる時に忘れてはならない縮約形と累積否定に移ることに
する。

〔5〕 縮約形

縮約形とは、否定副詞 *ne* がその母音を失って、それに続く語と融合した形である。こ
こでは単独で用いられたもののみ取り扱う。

PPI

I nolde fonge a ferþing • for seynt Thomas schrine! (6:48)

私は、聖トマスの墓にある財宝でも、一文も受け取れません。

GGK

Nade he sayned hymself, segge, bot þrye, (763)

騎士は3回だけしか十字をきらなかつた。

縮約形は単独では Pearl に現われない。以下、PPI, GGK に現われる縮約形の種類と使用頻
度を挙げておく。

PPI

nedde (ne hadde)	3
nulle (ne wolde)	2
molde (ne wolde)	3
neore (ne were)	3
合 計	11

GGK

nade (ne hade)	2
molde (ne wolde)	3
nafe (ne haf)	1
nif (ne if)	1
合 計	7

中期英語における縮約形については、S.R. Levin (注8)によると、「Southern, West Midland では非縮約形がほとんど用いられないのに対し、East Midland, Northern では非縮約形の方が多い。」とされている。本稿で扱った頭韻詩に関しては、Pearl では縮約形は単独では現われず、累積否定の形で2例現われるだけである。GGK, PPI でも、単独で現われる縮約形、累積否定の形で現われる縮約形を合わせても、それぞれ8例、26例である。従って、これらの頭韻詩では、縮約形は痕跡を留めているにすぎないと言えよう。

[6] 累積否定

累積否定は2個以上の否定詞が重ねられた否定表現で、否定詞が相殺せず、否定を強めていると思われる表現である。実際、否定詞が三つ以上重ねられることはまれで、本稿で扱う作品では、Pearl, Havelok, PF で1例ずつ現われるだけで、大抵否定詞は2個である。

PPI

Pat nis no treuþe of Trinite · but tricherie of helle, (1:172)

それは聖三位一体の真理でなくて地獄の裏切りである。

Pearl

Purȝ woȝe and won my lokyng ȝede

For sotyle cler noȝt lette no lyȝt. (1050)

私は城壁と宮殿を見渡した。すべてが透明で明るく輝いていたので、何も光を防げなかった。

PPI, GGK, Pearl に現われた累積否定を否定詞の組み合わせという観点から分析すると次の結果を得る。

PPI

nis ... not	2
nis ... no	8
nas ... not	2

nam ... not	1
no ... molde	1
nile ... not	1
no ... ne	2

not ... non	1
neuere ... no	1
合 計	19

Pearl

ne ... neuer	1
ne ... no	3
nozt ... no	1
nis(nys) ... no	2
no ... nawhere	1
neuer ... non	1
合 計	9

GGK

no more ... neuer bot trifel (= not a bit)	1
neuer ... no	1
no ... no	1
no ... nawhere	1
non ... no	1
nolde ... bi no wayes (= by no means)	1
合 計	6

上の累積否定の結果から、累積否定の種類は「ne + 他の否定詞」「縮約形 + 他の否定詞」の形式が多いことがわかる。このことから一つの問、「何故累積否定が現われるのか」に対して一つの解答が導き出せるのではないだろうか。すなわち、ne それ自体が否定詞としての機能及び存在が弱いためもう一つ別の否定詞を要求していると考えられる。

2. 脚 韻 詩

頭韻詩に続いて、脚韻詩に現われる否定表現を扱うことにする。ここでは頭韻詩と比較して、特色ある点のみを述べていくことにする。

〔1〕 ne

同じ脚韻詩でも14世紀前半に書かれた Havelok に関しては、否定副詞 ne の使用頻度は高く、14世紀後半の Chaucer の作品では使用頻度は低い。

be 動詞	4
be 動詞以外の動詞	28
助動詞 + 動詞	11
合 計	43

Havelok に現われる否定副詞 ne を、動詞との共起関係という点から分析していくと次の結果を得る。

否定副詞 ne が多く用いられた Havelok でも、ne は be 動詞との結び付きは弱かったことがわかる。

〔2〕 ne ... not

否定副詞の ne と同じく、Havelok では ne ... nouht の形で20例現われるのに対し、HF, PF

be 動詞	1
-------	---

では、それぞれ5例、2例だけである。Havelok の ne ... nouht も、動詞との共起関係からまとめると次の

be 動詞以外の動詞	11
助動詞+動詞	8
合 計	20

結果を得る。

ne ... nouht も be 動詞を否定することは稀である。
一般的に be 動詞を否定する場合は、本稿で扱った頭韻詩、脚韻詩とも ne, ne ... not 以外、つまり not, neu-

er が使われる傾向がある。

〔3〕 縮約形

Havelok に現われる単独の縮約形は nis 1 例だけで、累積否定の用例を合わせても 3 例にしかない。これに対して Chaucer の作品、HF, PF の縮約形は次の通りである。

HF

not	(ne wot)	4
nyste	(ne wyste)	4
nas	(ne was)	3
nys	(ne is)	1
合 計		12

PF

nyste	(ne wyste)	1
nis	(ne is)	1
nade	(ne hade)	1
合 計		3

HF, PF でも縮約形は多く用いられていないが、not, nyste の形が現われているのが特徴である。

〔4〕 累積否定

脚韻詩で現われる累積否定も「ne + 他の否定詞」「縮約形 + 他の否定詞」の二つの形式に分かれる。

Havelok

He was so faste with yvel fest

Pat he ne mouhte haven no rest. (145)

彼は重い病気にとりつかれていたので眠れませんでした。

HF

And somme sayde, “I not never what.” (2148)

誰かが言った。「何かわからない。」

脚韻詩に現われた累積否定を整理すると次のようになる。

Havelok

ne ... nevere	7
ne ... no	11
ne ... non	5
ne ... none	1
ne ... no more	1
ne ... nevere mo	2
noide ... ne nouht	1
nis ... nouht	1
nought (= nothing) ... ne	1
nevere ... non	2
合 計	32

PF

ne ... nevere	1
ne ... no	1
ne ... nevere mo	1
non ... non	1
nyl ... nat	2
nas ... no	1
nys ... not	1
合 計	8

HF

ne ... no	2
ne ... never	1
noght ... no	1
not ... never	2
nostow ... not	1
nyl ... not	1
nyl ... noght	2
nyl ... noon	1
noide ... no	1
nas ... never	2
nas ... not	1
nas ... nothyng	1
nere ... nought	1
nere ... no	1
合 計	18

上の三つの脚韻詩に現われる累積否定の結果からも、否定副詞 ne が単独で否定を表し得る機能を有している一方、ne の存在があまりに小さいので他の否定詞を要求するという二つの側面があったと考えられる。そして後者の場合、否定詞としての能力は ne 以外の否定詞が持っていると言えよう。

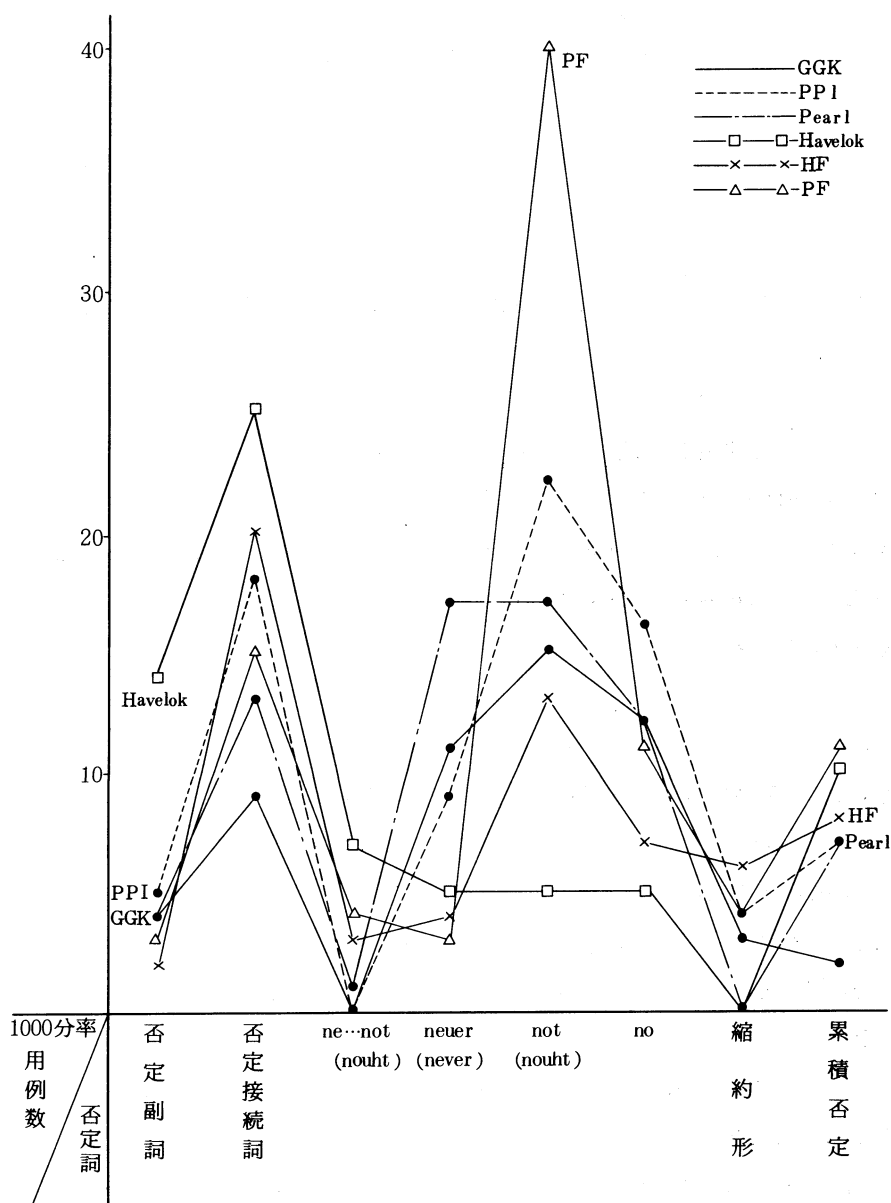
Ⅲ. 結 論

本稿で扱った頭韻詩、脚韻詩に現われる主な否定表現をまとめたのが次の表である。(注9)

種 類 \ 作 品	GGK	PPI	Pearl	Havelok	HF	PF
否定副詞	11	14	5	43	5	2
ne 否定接続詞	23	47	16	76	45	11
ne ... not (nouht)	1	1	1	20	6	3
neuer (never) ^(注10)	27	22	21	16	8	2
not (nouht) ^(注11)	38	56	21	15	29	28

no	31	42	15	14	16	8
縮 約 形	7	11	0	1	12	3
累積否定	6	19	9	32	18	8
合 計	144	212	88	217	139	65

この統計の数字をそのまま比較はできない。そこでこれらを基にして千分率(注12)で表すと次のグラフになる。



このグラフと本論より次のことが結論として導き出せる。

1. Havelok では否定副詞 ne と累積否定が主流を占めている。
2. Pearl, GKG では neuer, not, no が主流を占めている。
3. PPl, PF, HF では not が主流を占めている。
4. Havelok を除く作品では、否定副詞 ne と ne ... not の使用頻度は低く、衰退の傾向にある。
5. 否定接続詞 ne は、各作品によりばらつきはあるが、使用頻度は高い。
6. 縮約表現は作品全体を通して単独で現われる頻度は少ない。
7. not が否定副詞 ne と同じく、動詞の前に置かれる構造は、GKG で 1 例のみ現われる。
8. 累積否定は、頭韻詩、脚韻詩とも「ne + 他の否定詞」「縮約形 + 他の否定詞」の形式が大部分を占めている。これは、ne が否定詞としての機能及び存在が弱いため累積否定の形式が現われると考えられる。そして、ne 以外の否定詞の方が、否定の機能を有している印象を与えている。

(注)

(注 1) 本稿では、Old English, Middle English を「古期英語」「中期英語」と訳す。更に中期英語は次のように区分できる。

前期中期英語 A.D. 1150 – 1300

後期中期英語 A.D. 1300 – 1500

この区分は、中尾俊夫 1972 「英語史Ⅱ」から引用したものである。

(注 2) Miyabe,K. (宮部菊男) 1968. “On some features of negative sentences of early Middle English.” Studies in English Literature, pp.83-103.

(注 3) Kent,Ch.W. 1890. “Of the Use of the Negative by Chaucer, with Particular Reference to the Particle Ne.” PMLA, pp.109-47.

(注 4) Jespersen,O. 1917. Negation in English and other languages. Copenhagen, pp.9-10.

(注 5) 例文は、頭韻詩では PPl と Pearl, 脚韻詩では Havelok と HF から挙げているが、必要に応じて GKG, HF から挙げることとする。なお訳文は、参考文献に示した本を参考に、できる限り原文に忠実に日本語訳を付した。

(注 6) 名詞句と名詞句、動詞句と動詞句のような場合もある。

(注 7) Visser,F.Th. 1969. An historical syntax of the English language. vol.3. Leiden: E.J. Brill, p.1532.

(注 8) Levin,S.R. 1958. “Negative construction: an Old & Middle English dialect criterion.” JEGP 57, p.499.

(注 9) 否定詞が、頭韻語、脚韻語として用いられているものは統計から除いてある。

- (注10) GGK, PPl, Pearl では neuer, Havelok, HF, PF では never となっている。それぞれ使用テキストによって異なる。
- (注11) Havelok では not ではなく nouht が用いられている。
- (注12) $\frac{\text{用例数}}{\text{行数}} \times 1000$ で計算する。得られた数値は小数第1位を四捨五入してある。参考までに得られた数値を挙げておく。

種 類 \ 作 品	GGK	PPl	Pearl	Havelok	HF	PF
ne 否定副詞	4	5	4	14	2	3
否定接続詞	9	18	13	25	21	16
ne ... not (nouht)	0	0	1	7	3	4
neuer (never)	11	9	17	5	4	3
not (nouht)	15	22	17	5	13	40
no	12	16	12	5	7	11
縮 約 形	3	4	0	0	6	4
累積否定	2	7	7	11	8	11
合 計	56	81	71	72	64	92

◎ 作品略語表

GGK	Sir Gawain and the Green Knight
Havelok	The lay of Havelok the Dane
HF	The House of Fame
PF	The Parliament of Fowls
PPl	Piers Plowman

◎ 参考文献略語表

EETS	Early English Text Society
JEGP	Journal of English and Germanic Philology. Urbana, Ill.: Univ. of Illinois.
PMLA	Publications of the Modern Language Association of America. New York: Modern Language Association of America.

◎ 使用テキスト

Gordon,E.V. 1953. Pearl. Oxford: Clarendon.

Tolkien,J.R.R. and Gordon,E.V. 1966. Sir Gawain and the Green Knight. rev. Davis,N.
Oxford: Clarendon.

Schmidt,A.V.C. and Jacobs,N. 1980. Medieval English Romances. Part One. Oxford.

Skeat,W.W. 1867. Pierce the Ploughmans Crede.

Robinson,F.N. 1979. The Works of Geoffrey Chaucer, 2nd ed.,. Oxford.

◎ 参考文献

Barron,W.R.J. 1979. Sir Gawain and the Green Knight. New York: Manchester University
Press.

Cawley,A.C. and Anderson,J.J. 1976. Pearl, Cleanness, Patience and Sir Gawain and the
Green Knight. New York: E.P.Dutton & Co.Inc.

Davis,N. et al. 1981. A Chaucer Glossary. Oxford.

Jespersen,O. 1917. Negation in English and other languages. Copenhagen: Munksgaard.

Mossé,F. 1979. A handbook of Middle English. tr.by J.A.Walker. 1952. Baltimore:
Johns Hopkins Press.

Mustanoja,T.F. 1960. A Middle English syntax: 1 parts of speech. Helsinki: Société
Néophilologique.

Nakao,T. (中尾俊夫). 1972. 「英語史Ⅱ」 東京. 大修館

Ono,S. and Nakao,T. (小野 茂・中尾俊夫). 1980. 「英語史Ⅰ」 東京. 大修館

Sisam,K. 1978. Fourteenth century verse and prose. Oxford: Clarendon.

Skeat,W.W. 1965. Chaucer Complete Works. Oxford.

Skeat,W.W. 1915. The lay of Havelok the Dane. rev.Sisam,K. Oxford: Clarendon.

Skeat,W.W. 1884. Piers Plowman. EETS 81.

Tolkien,C. 1979. Sir Gawain and the Green Knight, Pearl and Sir Orfeo. tr.by Tol-
kien,J.R.R. London: George Allen & Unwin Ltd.